

zhāo wén dào xī sǐ kě yī
朝聞道，夕死可矣。

あした むすべ か
朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり 〈里仁第四〉

桜美林大学名誉教授 植田 渥雄

二十歳前後の頃、『論語』の中でこの表題の一文を目にした時、何とカッコいい言葉だろうと思いました。その日のうちに命を投げ出してよいと思えるほど、それほど価値のある何かがこの世の中にあると自覚できること自体が羨ましくもありました。そんな価値のあるものは、私には到底見つけ出すことができないと思っていたからです。

ところが、何年もかかって『論語』を読み返していくうちに、この言葉にやや違和感を覚えるようになってきました。「死すとも可なり」とは、ずいぶん過激な表現ですが、そもそも『論語』はある意味では命の尊さを説いた書物です。その孔子を「死すとも可なり」という気持ちにさせた「道」とは、一体何なんだろう、と考えながら『論語』を再度見渡してみると、「道」という文字が50か所以上も出てきます。しかし、その示す意味は多岐にわたっていて、一言ではとても説明しきれません。ただ印象に残る言葉がいくつかありました。その一つは、「吾道一以貫之(Wú dào yī yǐ guàn zhī) (吾が道は一以てこれを貫く)〈里仁第四〉。私の道は一つのことで貫かれている、というものです。この意味を理解できない門人たちに対して、愛弟子の曾子は「夫子之道，忠恕而已(Fū zǐ zhī dào zhōng shù ér yǐ) (夫子の道は忠恕のみ)と解き明かしています。わが師の道はただ一つ、忠恕(誠実な心と他者への思いやり)、これに尽きると。これで見ると「道」とは、「人間としてのあるべき姿」という意味に解釈できます。

この解釈に間違いはないはずですが、これを表題の言葉に当てはめてみると、「人間としてのあるべき姿の何たるかを聞けば、その日のうちに死んでもよい」ということになります。多くの注釈書はこれを誇張表現とみなし、「道」の大切さを

強調したものだとしていますが、たとえ誇張表現であるとしても、あまりにも唐突で、孔子らしくありません。

一方、他の所では「道」について次のような語句が見えます。「天下之无道也久矣。天将以夫子为木铎(Tiān xià zhī wú dào yě jiǔ yǐ。Tiān jiāng yǐ fū zǐ wéi mù duó)」(天下の道無きや久し。天將に夫子を以て木鐸と為さんとす)〈八佾第三〉。天下の「道」が失われて久しい。だから天は孔子を地上に降して木鐸と為そうとしているのである、と。

木鐸とは大きな鈴のことで、これを鳴らして、政令を天下に知らせるための道具です。これは孔子が弟子たちを連れて衛の国に入る際、儀という国境地域を管理する衛国の或る役人が、孔子の弟子たちに語った言葉です。ここでいう「天下の道無きや」の「道」とは社会道義のこと、つまり天は、失われかけた社会道義を復活させ、広めるために孔子を天界から下界に遣わした、ということです。

天から遣わされたかどうかはともかくとして、事実、孔子は暴力を否定し、道義に基づく秩序ある平和な社会を実現するために生涯をかけていました。しかし現実世界はそれとは裏腹に、強権政治が横行し、民衆は苦しむばかり……。表題の言葉はこうした現実認識から出たものと思われる。とすると「社会道義が実現されればいつ死んでもかまわない」ということ、逆の面から言えば「それが実現されない限り死んでも死にきれない」ということにもなります。これは誇張表現でも何でもありません。晩年を迎えた孔子の素直な気持ちの表れであると同時に、次世代へのメッセージでもあったと言えるのではないのでしょうか。

(わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師)